
八十八日間、恋の始まり

荒樫セイ × 天霧ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八十八日間、恋の始まり

【Nコード】

N9500I

【作者名】

荒樫セイ×天霧ありす

【あらすじ】

高校受験に失敗し、第一志望の高校に行けなかった「俺」。毎日やる気をなくし、気を紛らわすために部活にはいることにする。部活は楽しかったが、僕の心の中はぼっかりと穴が空いていた。そんななか出会ったのが黒髪で、猫目。少し電波でおにぎりを作るの
がありえないほど下手くそな、アークだった……

「米」っていう字は八十八って書くのを知っているか？ 昔米を作るためには八十八日間ぐらい手間暇がかかるって言われていたんだ。苦勞してやっと実った稲穂っていうのはまた農家の人にとって格別なんだろうな。

なんの因果か俺の恋もちょうど八十八日間びったりで実った。しかも苦勞して作った米を炊いて、ぎゅっと丸め込んだ「おにぎり」で俺はあいつに恋をした。

訳が解らない？ ま、その通りかも知れない。なにしろあいつの作ったおにぎりは果たしておにぎりと呼べるかどうか怪しい代物だった。ただ丸めただけ、俺が手を付けるとすぐモロモロと砕け散るような、そんなもの。

でも俺はそれより、そのおにぎりを握ったあいつに興味を持った。そう食べる直前に俺にあんなことを言ったから。

「それ、中身何も入ってないから」

ただ米を握っただけ。にぎり。

「これは……おにぎりですか？」

「にぎってあるから、おにぎりです」

俺とアーコの八十八日間、恋の始まり。

高校受験に失敗しました。もうやる気も出ません。一応第二希望の高校に入れたけど、所詮は第二希望。描いてた未来像とは全く違います。俺は毎日が気だるかった。全く教室で嬉しそうに自己紹介なんかしてる場合じゃないっての。俺はこんなとこ、来たくなかったの。本当はあっちの制服を着て、今頃は楽しく友達を作ってた。

なんか言ったら悲しくなってきた。クラスで俺だけが取り残さ

れている気分になった。そんな気分を紛らわしたくて、俺は部活を見に行った。何かの部活に入ろう。それで全てを忘れてしまえばいい。俺はそう思って、陸上部に入ることにした。走るだけだし、俺にも出来るかも知れない。なにより今は何かをしたかったから。

陸上部は思ったより楽しかった。仲間が気の良い奴ばかりで、俺を歓迎してくれた。これでいいんだ、忘れる。

同じ新入部員の坂井とは結構仲良くなった。いつも冗談ばかり言っただけで俺を笑わせてくれる。

「中西、今日の練習お前へばってただろ？ 後ろから見ても切なくなつたよ。お前さ、もっと体力つけたほうがいいよ。俺のプロテイン飲むか？」

「ほっとけ」

そう言っただけ俺たちは笑い合った。

練習はきつかったが、仲間といえるのは楽しい。俺は心の何処かでまだぼっかり空いた穴をふさぐように、走った。きつとこれは気のせいだと信じている。これから何か変わると夢見ている。でも俺の中のくすぶりはまだ、収まらない。

俺が所属している陸上部は練習が終わってからマネージャーがおにぎりを作ってくれる。いつも選手のために握ってくれるおにぎりは愛情たっぷりだ。疲れた体に染みこむようだった。まず先輩がおにぎりを取ってから、新入部員の俺たちも群がった。

「マジ、うまいっす。俺はこれのために今日この練習をしてきたっと思えるっす」

「坂井、取りすぎだ」

「いや、だってこんなにうまいのを目の前にして……」

突然言葉を無くした坂井の視線を俺は追ってみると、弁当の隅に良く言えば俵型のおにぎりらしきものがぼつんと残されていた。

「これ、何？ 中西、これ何？」

「いや、おにぎりでしょ」

「おにぎりか」

じゃあ、食べて。坂井の目は俺にそう語っていた。せつかくマネージャーさんが心を込めて作ってくれたおにぎりを残すわけにはいかない。別に俺じゃなくてもいいのに、なんで俺なのか。仕方なく俺はそれに手を伸ばした。

そして冒頭部分へと繋がるのだ。

そのおにぎりを作ったあいつは俺と同じ一年。マネージャーの方の新人部員で、名前は白石アヤコ。黒いショートカットに猫目。どこか電波な雰囲気を漂わせる、不思議な奴だ。みんなからはアークとあだ名を付けられている。

坂井曰く、「あいつの作った料理は料理じゃない」だそうだと。りあえず作るもの全てが、ぐしゃぐしゃだった。毎回それを食べさせられる選手の身にもなつて欲しい。先輩であるアネゴマネージャーは彼女の作る料理を見て、「いつかはうまくなるわよ」というて聞かない。もう一ヶ月以上経つのにあれだから無理だろうと思う。ま、俺自身はアークのおにぎりに問題があると思っっているので、アーク自身にはそれほど嫌な感情は持っていなかった。

そんなアークと俺は初めて喋る機会を持った。部活が終わった帰り、偶然スーパードで買い物をしているアークに出会った。アークはスーパードのかごに佃煮やら、ふりかけやらを大量に購入していた。

「すごい量のごはんのお供だな。好きなのか、コメ」

「おにぎり作るの。その中身よ」

「おにぎり……」

俺はいつものアークが作るおにぎりを思い出した。もしかしてアークは練習して居るんじゃないだろうか、あのおにぎりをもっと良くするために。

「練習してるの。うまくなるように」

やっぱり。俺は感心してアークを見た。アークはべつに得意げで

も、何でもない顔をしてただ材料の方を見ていた。

「うまくなると、いいな」

「なるなじゃだめなの、絶対うまくなるの」

アーコはそう言っただけを見た。その目はただ純粹すぎて俺には少し眩しかった。

それから俺とアーコは少しずつ部活内で喋るようになった。アーコは相変わらず変な奴だったし、おにぎりも上達しなかった。

「アーコ、お前全く上達しないのな」

「上達って言うのはいつも目に見えるばかりじゃない。何か毎日変わっている、だからそれでいいの」

「やっぱアーコは分かんねえ」

「別にあなたになんて理解されたいとも思わない」

「ごめん、俺が悪かったです。許してください」

アーコは別に顔色一つ代えずに、スタスタと自分の鞆を取りに行った。俺は怒らしてしまったかなと不安になったが、あのアーコのことだ。何も考えちゃいないだろう。するとアーコが鞆を抱えて俺の所に戻ってきた。そして鞆の中からなにやらアルミホイルで包まれた物体を取り出した。

「何、これ？」

「見れば分かるわ」

俺はそのアルミホイルを恐る恐る開けてみた。のりたまがかかっている、おにぎり。

「シロご飯から卒業したの。これで味がついてる」

「……やっぱアーコは分かんねえ」

俺がじつと目の前のおにぎりを見てみると、アーコはくるりと後ろを向いた。短い黒髪がぱさつという音を立てる。

「今度の試合、頑張つてよね。みんな応援してる」

「アーコ」

俺の中のざわめきがまた大きくなる。

「今度の試合相手、北校だった？ あそこ強いよ」

「知ってるさ、北校がどんな所かっていうことも」

だって俺が行きたかった高校なんだからさ、中学の頃から知ってるんだよ。陸上部が強いつて事も、水泳部が全国レベルだってことも。俺の口の中で何か苦いものが広がっていく。やっぱり俺は忘れられないんだ。あそこに、行きたかった。

「北校……か」

「何か言った？ 中西くん」

「いや、何も」

アーコはちよつと俺を見て、つまらなそうに髪をいじった。その仕草が、アーコにしては可愛いと思ってしまう、俺は顔を背けた。

「北校、わたしは落ちてしまった」

「……え」

「落ちたの。結構本命だった。それは自分の弱さのせい。自分の弱さに、負けてしまったの」

「……」

「でもわたしは後悔はしていない。人は何か進まなければいけないの。私にとってはそれは、このおにぎりを作ることに」

アーコはそういうと俺の方を見つめた。その大きな猫のような目が俺を射抜く。アーコは、この人は、強い。

「だから、負けちゃいけないの」

試合の日になった。俺なりにこれまで考えてきた。いったい何のためにここにいるのだろうか。試合が近づくにつれて、練習も烈しくなってきた。坂井と俺はその厳しい練習に毎日耐えていた。しんどかったが、結果が伴ってきた。俺なりのタイム、俺なりの精一杯がそこに現れていた。

つらくなったら俺はいつもアーコとしゃべった。俺はアーコに自分も北校を落ちたことを告白した。アーコは別になんと言うことはないという顔をして「そう」と軽く言っただけだった。それが逆に

自分にはすんなりと受け入れられた。

俺の中で何かが変わり始めた。ぽっかり空いていた穴が、何かで埋められていく。その思いは自分の中でじわじわと自覚されていく。苦かった味が、甘酸っぱいジャムに変わる瞬間。

「中西くん、いよいよ出番だね」

「俺は勝つよ、北校であるつと、どこであるつと」

「怖い？」

「いや、不思議と怖くないんだ」

アーコは鞆の中から見慣れたアルミホイルを取り出した。

「開けてみて」

いつもの、のりたまにぎり。

「違う、食べてみるの」

俺は一口かじった。中から佃煮がちょこんと顔を出している。

「これ」

「のりたまにぎりを卒業。これからが本当のおにぎりだから」

いつもは無表情のアーコが、顔を赤らめて笑った。初めて見たかもしれない。アーコの笑顔を。

「俺、負けないから」

「そろそろ時間」

アーコはそう言うところりと後ろを向いた。今しかない、今なら言える。ちょうどアーコに出会ってから八十八日目。もう迷わない。

「アーコ」

「俺、アーコのことが好きです」

アーコは俺の方を振り返った。黒髪がアーコの顔を隠す。そして猫のようなその瞳が俺を見つめた。顔は俺が見たこともないくらい真っ赤だった。

「それ、反則だから。わたしが先に言おうと思ってたのに」

米が育つのは時間も手間もかかる。それを思うと恋なんて、と思うかも知れないけど、俺にとってはこの八十八日間が大切なんだ。

アーク曰く「大切なものはそれだけ時間をかけないと、育たないの。目に見えるものでも、見えないものでも。そうして育ったものは、きつと、素晴らしいわ」だそうだ。

<終>

(後書き)

「荒樫セイ×天霧ありす」の小説をお読み頂きありがとうございます。

もともとブログに掲載していたものを、こちらにアップ致しました。「八十八日間、恋の始まり」は天霧ありすの方が執筆いたしました。気に入って頂けると幸いです。

もしよろしければ感想をお寄せください。今後の参考にさせていただきます。

よろしく願います。

他にも「魔法のシャーパーン」「くるくる」「ある猫の告白」などを掲載しておりますので、お暇でしたら覗いてくださると幸いです。

もしよろしければブログの方にも遊びに来てください。

<http://ameblo.jp/zirconia-123/>

長文失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9500i/>

八十八日間、恋の始まり

2010年10月8日15時13分発行